

日本十進分類法新訂 10 版試案の検討

A Critique of the Nippon Decimal Classification, Proposed 10th Edition

米谷優子[†] 川瀬綾子^{††} 北克一^{†††}
MAITANI Yuko[†], KAWASE Ayako^{††}, KITA Katsuichi^{†††}

概要：日本図書館協会分類委員会により、日本十進分類法新訂 10 版の試案が示されている。同委員会では、2014 年内の刊行を目指している由である。1995 年 8 月の日本十進分類法新訂 9 版の刊行以降、概ね 20 年ぶりの日本十進分類法の改訂である。

2013 年 11 月に「試案」の第 2 回説明会が東京で、2014 年 3 月に同「試案」関西説明会が開催された。著者たちは、関西説明会に参加し、「試案」についていくつかの提案、疑問点などを呈したが、実質 3 時間弱の説明、質問等の時間制約から分類委員会、会場参加者共に意を尽くした論議には至らなかった。そこで、「試案」について提言、指摘した内容を類目順に再構成し、その提言内容を明確にしておきたい。

いずれもよりよい新訂 10 版が刊行されるための、参考となることを願うものである。

キーワード：日本十進分類法新訂10版、NDC、資料分類法

Keywords : Nippon Decimal Classification 10th Edition, NDC, Library Classification

1 はじめに

日本図書館協会分類委員会(以下、「分類委員会」)により、日本十進分類法新訂 10 版の試案(以下「試案」)が示され、2009 年 11 月に試案(0, 2, 3, 7 類)および「情報科学と情報工学の統合問題」、「NDC・MRDF に関する検討」について中間報告会が開催されている。

さらに 2013 年 11 月に「試案」の第 2 回説明会が東京で開催、2014 年 3 月に同「試案」関西説明会が開催された。分類委員会では、こうした各種説明会やその他分類委員会に寄せられる各種意見、批判などについて鋭意検討を行い、現在の「試案」の作成に至っている。

この意味で現時点での資料としては、2013 年の二つの説明会で配布された『日本十進分類法新訂 10 版-試案説明会資料-』¹⁾(以下『試案説明会資

料』)が最新のものであり、委員会の改訂作業の現状が最も反映されていると考えられる。著者たちは、2013 年 3 月に開催された関西説明会に参加し、「試案」についていくつかの提案、疑問点などを呈したが、実質 3 時間弱の説明、質問等の時間制約から分類委員会、会場参加者共に意を尽くした論議には至らなかった²⁾。そこで、「試案」について提言、指摘した内容を類目順に再構成し、その考え方を明確にしておきたい。

また、著者たち以外の発言、意見の内、「試案」の構造に係る意見などについても紹介する。さらに、2013 年 11 月に「試案」の第 2 回説明会(東京)を受けて、分類委員会委員長的那須雅熙氏が図書館雑誌 2014 年 2 月号に報告記事³⁾を寄せておられるので、併せて参考にさせていただき、この報告で解決済みの事項については本稿では省略した。

いずれもよりよい新訂 10 版が刊行されるための、一つの参考となることを願うものである。

[†] 大阪市立大学・関西大学等

^{††} 京都精華大学

^{†††} 相愛大学

2 日本十進分類法新訂 10 版とその疑問

2.1 全体の構成

『日本十進分類法新訂 10 版』は B5 判の「本表・補助表編」と「使用法・相関索引編」の 2 分冊になることが示された。9 版の本表編の冒頭にあった「解説」は「序説」と「使用法」に分けて、本表編の前には「序説」のみを置き、分類規程等を含む「使用法」と、新設の「用語解説」は別冊の相関索引の前に置かれる。

「使用法」に「運用マニュアル」を含むとしているものの、『試案説明会資料』では「マニュアルは時間との関係で、新規の出版物として企画した方がよいとの意見もあり、本編では最低限の基本的な使用法の解説となるかもしれません」としており、説明会の口頭による説明では、別途刊行の可能性が示唆された。

『試案説明会資料』では、この「使用法」ならびに、「用語解説」の案は提示されなかった。

説明会では、分類規程の構成項目や記述文章の改訂についての質問が参加者からあり、委員会より改訂予定との回答があったが、これについても具体的な案は示されなかった。

これらについては、具体案が公開された時点で改めて検討を行いたい。

2.2 0 類 総記 (007 情報学を除く)

0 類では、情報科学 (007) に関する改訂が大きな要点である。これについては、548 情報工学等との関係から、『試案説明会資料』では「情報学」と項目を改めて説明が施された。

0 類の上記以外の箇所では、図書館学における新語出現等により、図書館学 (010) においても、項目名辞を「010 図書館. 図書館学」から「010 図書館. 図書館情報学」と変更したのを始め、「資料」を「情報資源」とする用語の見直しなどがなされている。概ね適切な変更である。以下、個別の疑問点を取り上げる。

014.3 (目録法) における注記で、「*典拠コントロールは、ここに収める」とあるが、014.3 は記述目録法の範囲であり、主題索引法である主題 (分類法・件名標目法) についての典拠コントロールは 014.4 であろう。

また、「014.34/.37 各種の目録」においては相

互に排他性がない。014.34 は紙媒体の目録が対象となる一方、014.37 はコンピュータ目録となっている。そうすると、総合目録である 014.35 はコンピュータ目録以外の総合目録ということになるのであろうか。ちなみに「014.35 総合目録」には、注参照として「*総合目録データベース→014.37」が指示されている。

区分原理が一貫していないため曖昧さが残る分類項目の展開であるといえる。いずれも説明会にて口頭質問し、検討するとの回答を得ているが、刊行前の確認を重ねてお願いしたい項目である。

一方、「014.4 主題分析：分類法. 件名標目法」に関して、件名標目法と分類法は主題分析の下位概念であるとの「試案」の記述は納得しがたい。014.4 は主題索引法でありその下位概念に主題分析や方法論としての分類法、件名標目法があるのではないだろうか。

また、「014.7/.8 各種の情報資源」では、各種の資料の名称は「日本目録規則 1987 年版改訂 3 版」における名称と一致させた」として、日本目録規則を基にした下位区分設定がなされているが、目録規則においては資料種別の観点が一貫しておらず、抜本的な見直しが求められているところである。これから刊行する新訂 10 版が、この問題点を内包したまま、メディアの形態とコンテンツと利用対象による分類が交錯している目録規則の区分を踏襲し、さらなる混乱を呼びそうな名辞を付加するのは甚だ疑問である。

ここに関して、たとえば、新聞のマイクロフィルム、地図のマイクロ資料はどちらに分類するのか、広く一般の利用も見込んで作成された録音図書と視覚障害者用資料としての録音図書を分ける必要があるのか、などの分類を学習する者からの質問が想定されるが、これに対して明解な解答ができるだろうか。

さらに、「014.77 視聴覚資料」においてはアナログ資料とデジタル資料が混在している。また「014.7 非図書資料. 特殊資料」の下に「014.79 視覚障害者用資料」があるが、その小項目名の一つに「大活字資料」が記述されているのはやや違和感がある。

これらの一部は、質問時に明解な回答がなかったり、あるいは説明会後に疑問として出てきたも

のであるが、刊行前に問題点を明白にされることを重ねてお願いしておきたい。

2.3 1類 哲学

全体にわたって、平成時代あるいは21世紀の分類が付加されているが、日本思想においては、「121.6 近代」とした分類に並列の項目として、「121.7 昭和時代・平成時代」が新設された。

121.7 を戦前も含めた「昭和時代」としてしまうことには違和感がある。

第一に思想や思惟などに係る分野においては、昭和という時代は「戦前/戦後」に大きな断絶が存在するのではないか。

第二には、9版で新設された西田幾多郎 121.63 和辻哲郎 121.65 三木清 121.67 はこのままでおくとすると、同時代のこの3名以外の哲学者（たとえば西田と同僚の九鬼周造）は、時代区分に従うと121.7に分類されて、西田と時代が異なる印象を与えてしまう。

「91 日本文学」では、昭和時代前期(1927-1945)と昭和時代後期(1945-1989)と、平成時代(1989-)をすべて別分類としていることと比較しても、1類の展開は大雑把すぎる区分展開とは言えないだろうか。

説明会では、時代をまたいで活躍した人もいるとの回答であったが、それはどの分野においても言えることである。他の類との整合性をとるためにも再検討が必要であろう。

次に、心理学において、今回大幅な改訂がなされた。145の異常心理学の下位区分は、「〇〇の異常」の項目名の見直しが図られ、「記憶の異常・思考の異常」は「記憶障害・思考障害」に、「知能の異常」は「解離性障害・転換性障害・多重人格障害・ヒステリー」と改められ、「意欲の異常」は「意欲障害」として新たに下位区分が設けられた⁴⁾。

異常心理学の下位区分に「障害」が置かれることには違和感がある。「障害」「症」といった語の用い方、それらを異常心理学の下位区分とすることとでよいか、再検討が必要ではないか。

また145.6にあった失語症は、分類表から消滅している(4類新設にも見当たらない)。一方、145.72 摂食障害は、493.745にも新設されている。

説明会では、他からも4類との関連、切り分けについての質問があった。その場では明解な回答はなかったが、特に資料の多いこの分野は、4類との明解な線引きが必要であろう。

さらに、199 ユダヤ教の下位区分も新設された。17 神道 18 仏教 19 キリスト教の下位区分とほぼ同じであるが、199.8 教派に下位区分を設けて固有補助表を付加するまではなかった。固有補助表については、追加事項や補助表とともに掲載することなどが論点としてあがっていることが紹介されている⁵⁾が、説明会時点では試案の提示はなされなかった。詳細の発表が待たれる。

2.4 2類 歴史

時代区分として、21世紀、または平成時代が該当箇所でも新設された。

カンボジア史では現代史の小分類を新設して、223.507 独立1949-としているが、ポル・ポト以前/以後を分けて考える必要があるのではないか。これについては、質問時の回答として「考える余地あり」の旨の回答であった。

アジア史では、マレーシア、インドネシア、フィリピンについて、国名の分類番号に首都名が追記された。これはイギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、オーストラリアでは首都及び首都を含む地域は国の下位分類になっていることと整合性を欠くのではないか。スペインの首都マドリード、イタリア首都ローマは掲載されていないままであることと合わせて検討される必要があるだろう。

227.9に「パレスチナとイスラエルの資料が混在しているので、パレスチナの項目を新設(227.99)し」ているが、227.99に付した注記「パレスチナ問題はここに収める」は腑に落ちない。「パレスチナ問題」は現代も存続する重たい政治課題であり、3類への案内があつてしかるべきであろう⁶⁾。

個人伝記について、289の下位に、.1日本人、.2東洋人、.3西洋人その他の、分類が独立した項目として新設された。日本以外の諸外国を西洋と東洋の概念で二分できるとする感覚は古すぎるのではないか。.3に「その他」を含めて三分法が成り立つとしても、この用語・分類法を用いることについて、再検討が必要ではないか。

三分法の実績が多いということだが、他の類に入る伝記は「主に活躍した国もしくは出身国で地理区分」としているものが多い（彫刻家 712 洋画家 723 音楽家 762 俳優 772）。ここからしても、三分法を独立項目にする必要は感じられない。

また仮に分類実績から三分法を踏襲するとしても、9 版の 289 の下のもう一方の注記「*出身国. もしくは主な活動の場と認められる国により地理区分してもよい」はそのまま残っている一方で、三分法が規定されると、三分法の下に地理区分を加えると解釈されないか。たとえばネルソン・マンデラ氏の伝記なら、289.3 としたうえで、地理区分を付けて 289.3487 とされないだろうか（9 版の注記に従って「地理区分」の方を採用していると、289.487 となる）。地理区分と三分法の扱いを明示する必要があるだろう。

2.5 3 類 社会科学

331.02→331.2 とするなど、9 版発表時に吉田が指摘していたいわゆる「やみ短縮」⁷⁾は一部が明記されるようになった。ただし、やみ短縮形の全てに指示が設けられたわけではないこと（318.02→318.2、ほかに、335.2, 337.2, 377.2, 519.2, 622, 712 にはいずれも指示の新設は資料には明記されていない）、そして、本来的な問題、すなわち分類順を乱す、本来すべきでない短縮が多くなされている事実については対処は見られず、引き続いでの問題である。

また、「341 財政学. 財政思想」の注記に、「公共経済学はここに収める」とあり、「試案」では「公共経済学は、従来財政学で扱われてきた問題をミクロ経済学的手法を用いて研究するもので」と説明があるが、これは Subject と Topics を混同しているといえないか⁸⁾。

2.6 4 類 自然科学

493.7 精神医学で構成が変更された。説明会でも意見が挙がっていたが、145 異常心理学との使い分けについて指示が求められるところである。特に、ヒステリー（493.743⇔145.8）、摂食障害（493.745⇔145.72）は同じ語が 2 か所で新設されており、注記が必要であろう⁹⁾。

看護学については近年大学で看護学部の新設が

増加しており、資料数の増加も既に起こっている。これについて説明会では細分化希望の声が出ていた。検討事項であろう。

新たな技術に対応して、448.9 に地理情報システム[GIS]が注記として加えられたが、この学問分野は「地理空間情報システム (Geospatial Information System) として、大気圏外から深海まで対象領域を拡張しており、名辞にも追加が必要であろう。

2.7 5 類 技術

548 情報工学等に、情報学の進展にあわせて大きな変更が加えられた。これについては情報学として別に取り上げる。

他には、「546 電気鉄道」を削除項目とし、その分「516 鉄道工学」、「536 運輸工学. 車両. 運搬機械」に項目を新設して移動させている。一括しての移動ではないため、移動には時間と手間がかかりそうだ。

その他、説明会では、他から 588 食品工業において、新設の「エール」の語ならびに「ワイン」に置き換えられた「ぶどう酒」の語について質問があった。質問では触れられなかったが 9 版の相関索引では、「ぶどう酒」には食品工業の他に、596.7 飲料への案内もある一方、「ワイン」は食品工業への案内しかない。ワインにおいても飲料への案内も設けるべきであろう。付け加えることとして、指摘しておきたい。

2.8 6 類 産業

「645 家畜・畜産動物各論」では、そもそも 9 版から、「645.6 犬」、「645.7 猫」、「645.9 愛玩動物[ペット]」となっており、上位概念の「愛玩動物」が、犬・猫と同列の、しかも分類の末尾にあることに違和感があった。今回それらに加えてその他の家畜・畜産動物 645.8 が新設（復活）されたが、これは混乱を拡大しないだろうか。むしろ愛玩動物<一般>は 645 に入れることにして注記で示し、その下位区分に、.2 馬、.3 牛、.6 犬、.7 猫、そして .9 をその他の家畜・畜産動物・愛玩動物 とする方が納得しやすい。新設予定の愛玩動物の食餌・給餌法は、645.0 の下位区分としてはどうか。

また、「649 獣医学」に付加予定の「*愛玩動物<一般>の病気と手当はここにおさめる」という注記も、同様に混乱を生むことが予想される。645.0 の下位区分とする方がおさまりがよいのではないか。

加えて近年、ペットとして爬虫類（ヘビ、トカゲ、ワニ、カメ等）を飼う例も増えていることから、これについての項目も設定する必要があるだろう。666.79 を両生類・爬虫類増殖と改めるようだが、『試案説明会資料』p60 の解説では、相関索引では「へび（畜産業）645.8 とする」とされている。666.79 の上位概念 666 は水産増殖であり、ヘビは特に 666 にはなじまないための措置かもしれないが、同じ爬虫類のカメ、ワニはそのまま 666.79 に残すのであれば、整合性を欠く。ペットとしての爬虫類はすべて「その他の愛玩動物」として 645 の下位区分に入れ、その旨を注記してはどうだろうか。

2.9 7類 芸術

「724.5 題材別画法」において、注記「*ここには、材料に限定されない題材別画法を収め、一材料に限定される題材別画法は、各画材の下に収める」が追加され、「題材よりも画材を優先する」ことが明示された。

本来「<724/725> 絵画材料・技法」であり、「724.5 題材別画法」である。この 724.5 に注記を新設し、参照「例：724.3 油絵風景画」の技法を付している。しかし、第9版では「<.3/.6 洋画>」において、「.3 洋画・油絵」、「.4 水彩画・アクリル画」、「.6 壁画・フレスコ画」、「(725)<.3/.6> 画材別の素描・描画」が展開されており、題材、画材、画法が入り組んでいる。

また、「724.5 題材別画法」における注記の「守備範囲」は、<724/725>の範囲であり、「724.1 日本画・東洋画」には及ばないと推察される。

今一度、絵画における題材、技法の関係の見直しが必要ではないだろうか。

「726.1 漫画・劇画・諷刺画」であるが、漫画が総称で、劇画はその一面風であり、諷刺画は漫画の一形式であろう。この意味では、項目名を「726.1 漫画：劇画・諷刺画」とするほうが適切と考えられる。

また、「726.1 漫画・劇画・諷刺画」には、下位区分「726.101 漫画・劇画論・諷刺画論」がある一方で、ここに付された注記には「*個々の作品論は、726.1 に収める」とある。全体を扱ったものが個々の作品論の下位区分に来るのは分類の原則（「一般から特殊へ」）に照らして違和感がある。説明会での質問に対して修正の回答をいただいているが、文学作品や他の箇所での分類と比較してほぼ同様の丁寧さを期待したい。

さらに「726.1028 漫画家・劇画家・諷刺画家<列伝>」の第二の注記には「個人の場合は主な活動の場と認められる国、もしくは出身国により地理区分」とある。絵画においても伝記箇所での同一の「もしくは出身国により地理区分」の表現が存在した。この扱いは、9 類文学の伝記の事項とは明らかに異なる。漫画・劇画・諷刺画は、文学よりも絵画に近い、という考え方であろうか。少なくとも、文字を持つ漫画類は、9 類での扱いと同様の別法が必要ではないだろうか。

スポーツに関して、784.8 ボブスレーは「ボブスレー」の方が一般的であろう。また、フリークライミングは戸外レクリエーション 786 の下位に位置するが、屋内で行うフリークライミング（ボルダリング、リードクライミングやインドアクライミング）もここでよいだろうか。そうであれば 786 の項目名に付加が必要ではないか。

上は説明会では質問できなかったところだが、検討をお願いしたいところだ¹⁰⁾。

2.10 8類 言語

文法辞典の注記の付加から、形式区分は言語共通区分の後につけることが例示で明記されることになり（語源辞典 812.033、文法辞典 825.033 など）、9 版で生じていた、共通細目を重ねないという明記されていない不文律¹¹⁾に関する疑問への回答が示されたとみられる。従来の「不文律」は改められたと解釈してよいのだろうか。

810.2「国語史」の項目には、「日本語史」を先に記載してはどうか。また、810.2 に新設する例示「815.02 日本文法史」は「日本語文法史」とする方が適当であろう。

828.1 の北京方言は方言なのか。北京語と北京官話とは違うのだろうか。確認が必要だろう。

2.11 9類 文学

9類では、言語区分の後、文学共通区分を加えて分類番号を構成することになっている。だが、10版では、949の注記で*849のように言語区分例：.3 オランダ文学、.4 北欧文学・・・と言語区分だけを付した例示でとどめ、「文学共通区分による注記を削除」¹²⁾するとある。これは混乱を招く恐れがある。たとえば、「オランダ文学」の例示があると、逆に、例示にあるようなある程度の桁数の言語区分を用いた場合には、文学共通区分は付加せず、「文学」の段階までで分類を終える（文学共通区分による分類は必要ない）と誤解を与える可能性がある。むしろ、「オランダ文学」で分類される資料は實際上少なく、文学作品は「オランダ語の小説」や「オランダ語の詩」などと文学形式で細分すべきなのであるから、省略すべきは言語区分だけにとどめた例示であって、文学共通区分まで付加した例示は掲載すべきであろう。979、989、993、994、995も同様である。

2.12 情報学

0類の「007 情報学」、および5類の「548 情報通信」、「547.48 情報通信」、「694 電気通信」事業については、「情報学」とまとめて説明がされた。

10版改訂に際して、一番の懸案事項であったところである。

NDC 最初の構想時には予想もされていなかった分野が急速に発展を遂げてきたことに対し、これまでの書架分類を引き継ぎながら、更に未来も見据えて対応を考えていくのは、並ならぬご苦労であったことであろう。

今のうちに大々的な変更を考えるべきという考えもある。後に尾を引かないのかという懸念もあるが、今回基本的には「記号的な統合よりも、概念（観点）の明確化による区分の整理に力を注いで改訂を行った」¹³⁾とのことで、結果としては、「別法」が多く用意されることとなった。個々の図書館での対応にある程度任せる方法も致し方ないかもしれない。ただし、「従来の別法（二者択一）に加えて新たな別法も設け拡充した」という「別法」の扱いについて、「使用法」で丁寧に解説されることが望まれる。

別法は9版では解説3.1.3で「利用者の便宜を考えて別法を採用することは遠慮する必要がない（略）その際使わないほうの分類項目から「をみよ参照」を付けておくことを忘れてはならない」¹⁴⁾とするにとどまっているが、学習者を見ていると、「別法」の採用は各項目についてそれぞれ判断してよいのか、「別法」として統一して採用すべきかについて判断に迷う様子が見られる。このあたりも含めて、丁寧な対応を期待したい。

なお、個々の項目について、「007.1 バーチャリアリティ」はアプリケーションの世界であり、情報理論に入れるのは違和感があるだろう。クラウドコンピューティングは547.48に注記があるが、これもデータベースを核とする情報環境システム（情報プラットフォーム）のことであるので、007の下位分類とすべきである。

3 NDC10 版刊行に向けて

開架制が標準的な図書館の在り方として定着した現在、分類も図書館員だけがわかっている時代ではない。一般利用者にとってもわかりやすい、納得できる分類にしていく必要がある。それは10版への改訂方針として掲げられており、「分類作業が行いやすく、また利用者にもわかりやすい分類表をめざす」はまさに今回の改訂の基本として確認されるべきことであろう。その意味では、説明会で出ていたように、本表の該当箇所だけで詳細な分類ができるような、丁寧な説明の要望も真摯に検討されたい。

一方、学校図書館や町村図書館等の詳細な分類付与を必要としない図書館等に対しては、分類記号の論理的な「簡易採用」について、使用法等での解説を望みたい。

先にも述べたように、今回試案として提示されたのは、本表のみであり、改訂を加えて「解説」から改編されて「序説」と「使用法」となった部分や、新設されるという用語解説、補助表は示されなかった。「相関索引」はまだ全体の検討に着手できていない¹⁵⁾ともある。さらに、使用者からいえば、上の各部に加えて、9版から10版への移行テーブルも、10版採用・移行に当たって欠かせないツールである。それぞれ気になるところだ。試案の完成・公開が待たれる。

今後まだまだ莫大な確認作業の必要が出てくるだろうが、9 版刊行時の誤記・誤植の蔓延を繰り返さないためにも、効率的で正確性の高い、NDC 維持管理データベースからのプログラムによる版面出力方式での制作・編集、そして確認を強くお願いしておきたい。

標準分類としてある程度定着したものを時代に即応して改訂を加えていく作業量は並大抵のものではないだろう。そこをおして試案発表までこぎつけられた担当者に敬意を表しつつ、まず寄せられた質問や検討事項には丁寧に対応してから 10 版が刊行されることを望むものである。

¹⁾ 日本図書館協会分類委員会『日本十進分類法新訂 10 版-試案説明会資料-』2013 年 11 月, 92p

²⁾ 日本十進分類法(NDC)新訂 10 版試案説明会 (プログラム)を抜粋で示す。

日時: 2013 年 3 月 11 日(火) 13:00-17:00

プログラム (抜粋)

13:00- 説明会開催にあたって

NDC10 版の構成、補助表、相関索引等について

13:30-16:00

NDC10 版試案概説

報告 1) 1, 2, 6 類

報告 2) 3, 4, 類

報告 3) 0, 5 類

報告 4) 情報学および関連領域

報告 5) 7, 8, 9 類

³⁾ 那須雅熙『『日本十進分類法(NDC)新訂 10 版』試案第 2 回説明会の概要』『図書館雑誌, 108(2), 2014. 2, p. 125-128.

⁴⁾ 該当箇所は 9 版では以下のようにになっていた(下線筆者)。

145 異常心理学

145.5 知覚の異常: 幻覚. 錯覚

145.6 記憶の異常: 思考の異常

妄想、健忘症、失語症

145.7 意欲の異常: 性的異常, 近親相姦. 自殺

145.8 知能の異常: 知能遅滞. 人格の異常: 多重人格. 人格分類

10 版資料では以下のように、「の異常」を「障害」に置き換えた例が目立つ(下線筆者)。

145.5 幻覚. 錯覚

145.6 記憶障害 思考障害

145.7 意欲障害

.71 自殺. 自殺行為

.72 摂食障害: 不食. 過食. 異食

.73 異常性欲. 性的倒錯: フェティシズム.

衣装倒錯. 露出症. 窃視症. 窃触症. 小

児性愛. サディズム. マゾヒズム

145.8 解離性障害. 転換性障害: 多重人格障害. ヒステリー

⁵⁾ 前掲 1) p5

⁶⁾ 各国史については、説明会で、スペイン史の下位区分(236.04 イスラム王朝時代)の年代について、指摘もあり、これについては、検討するとの回答であった。

⁷⁾ 吉田暁史「NDC の初歩的論理性における問題点」『整理技術研究集録』1(1993). p. 12-20

吉田は、「分類表では「一貫性」が最も重要である。例外にはよほどの実際的な根拠が必要である」として、「いまさら短縮形を全廃できないというのであれば、最低限例外箇所にはすべて指示を設けるべきである」と述べていた。

⁸⁾ 3 類に関して、説明会では他に次のような意見もあった。
・教科別教育の各教科 375.3/.8 では、英語科においても小・中・高別に展開すべきである。

・ディスレクシアについても 378 障害児教育等で考えるべき。「493.7 神経科学. 精神科学」との関係も明確にしてほしい。相関索引への記載も希望する。

⁹⁾ 摂食障害に関しては、他からも 145.72 との相違点について質問が出ていた。検討中との回答であったが、この回答が明確にならないと、この分類基準を用いる者の混乱を招く。

¹⁰⁾ 説明会では、7 類について他に、以下のような質疑もあった。

・727 グラフィックデザイン. 図案の注記に新設するコンピュータを用いて制作する絵画について、グラフィックデザインの分類でよいか、デザインとアートの違いを考慮する必要がある。

・763.93 電子楽器<一般>. 電子音楽の注記「ミュージックコンクレート」は古いため不要で、むしろ初音ミクのような DTM(Desk Top Music)について考慮すべきである。

¹¹⁾ 吉田暁史. 前掲 7), p. 15.

「国立国会図書館実務内規から始まったものか、共通細目を 2 つ重ねないというのが不文律になっている。NDC 自体にはどこにもその指示がないが、これだけ不文律が広まっている以上ははっきりさせるべきであり、その場合「2 つ重ねない」などという規定は設けるべきでない」

¹²⁾ 前掲 1) p79

¹³⁾ 前掲 1) p81

¹⁴⁾ 『日本十進分類法新訂 9 版』本表編 xxxi

¹⁵⁾ 前掲 1) p5